福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより

Tempus

Tempus Fugit —— 時は過ぎゆく

FUKUZAWA YUKICHI MEMORIAL
KEIO HISTORY MUSEUM

No.04
Jun. 2023

光陰如矢 かつてと今と

未完のキャンパス ―曾禰中條建築事務所と慶應義塾

三田キャンパスの第一校舎は、昭和12年(1937)9月竣工です。慶應義塾の多くの建築を手がけた曾禰中條建築事務所が慶應義塾に残した最後の建物となりました。この校舎と対をなす予定だった大建築は戦争の影響で実現せずに終わりました。

慶應義塾の建物は不統一だとも言われます。しかし、そのことが私立としての多くの苦悩も、震災も戦災も、高度成長期も経た歴史を表象していると考えれば、その不統一は歴史があるゆえの特権といえるかもしれません。

1937年竣工時(上)と2022年の同位置の三田第一校舎。屋上に教室が増設されているほかは、大きく変わっていない(撮影=石戸晋)。

歴史を受け継いでゆく、モノのちから

――よみがえった《塚本太郎レリーフ》

慶應義塾大学アート・センター学芸員　森山　緑

力強く伸ばした腕の先には水球のボール。視線はしっかりとそのボールを捉え、今まさに自陣のゴールを守ったというところであろうか。鍛えられた胸の筋肉が、躍動する若者の姿を的確に写している。若者の名は、塚本太郎である。塚本太郎は1923年生まれ、慶應義塾商工学校を経て大学経済学部で学んだ。水泳部水球部門でゴールキーパーとして活躍した塚本は、1942年の東亜競技大会に日本代表として選出されるなど、戦時下の日本水球界を代表する選手の一人であった。

1943年12月、経済学部在学中に彼は学徒出陣にて海軍に入隊した。敗戦が色濃くなってきた時期であるが、塚本は特攻兵器「回天」の搭乗員に志願し、1945年1月21日、西太平洋のカロリン諸島ウルシー海域で戦死した。「回天」はいわゆる人間魚雷と呼ばれた兵器で、魚雷の筒状形の中に乗組員が一人入り、出撃することはすなわち自爆を意味する兵器であった。当時ウルシー海域には米軍を中心とした連合国軍が多数の艦船を停泊させていたため、その撃破を目指したものであっただろう。しかし「特攻」という非情な兵器に自らを託し、若い命は海へと散ってしまったのであった。

塚本太郎は生前、戦場に赴く覚悟を音声録音で残したことが知られている。広告業を営んでいた父が仕事用に持っていた、録音スタジオでレコードにしたという。家族と学校に対する感謝と勇壮果敢な言葉でしめくくられた音声記録は、のちに母の遺品整理をした塚本太郎の弟、塚本悠策氏から慶應義塾へ寄贈されている。

本作品は、塚本太郎の両親が戦後に営んでいた「太郎湯」という銭湯に、1950年水球部員および三田水泳会がこのレリーフを寄贈し、銭湯の番台上に掛けられていたものである。 制作は、渋谷のハチ公(戦後の再制作像)で知られる彫刻家の安藤士(たけし)(1923-2019)で、石膏で造形された面にはブロンズ風に表現するため塗料が塗られている。長らく親しまれてきた「太郎湯」を1992年廃業するにあたり、このレリーフは日吉の水泳部合宿所に寄贈され学生たちを見守ってきたのだった。

2018年、このレリーフを修復できないかと福澤研究センターより相談があった。三田にある慶應義塾大学アート・センターが修復の専門家につなぎ、2022年9月、美しい額に嵌め込まれた塚本太郎のレリーフは日吉キャンパス協生館地下1階の水泳部ミーティング室に掛けられた。アート・センターは慶應義塾唯一の芸術研究所で芸術資料のアーカイヴ運営や展覧会の開催、教育・研究活動を行なっているが、塾全体が所蔵する美術品の管理を担う「美術品管理運用委員会」の事務局を三田の管財部とともに担っている。長年、多くの美術品の保存や修復を専門家に依頼してきたが、このレリーフは修復家も悩ませる特異な作品であった。

「太郎湯」の番台上に掛けられていた頃、作品表面が真っ青な塗料で塗られたようで、2018年に三田の体育会事務室に持ち込まれた時には一同驚いたことを筆者も覚えている。「この表面の塗料をきれいに剥がせるのだろうか」と修復家も思案していた。また、破損しやすい石膏で造形されていたために、ひび割れや欠損した箇所も散見され、移動するにも危うい状況だった。修復家がまずいろいろな溶剤を少しずつ試しながら青い塗料を剥がす実験を行ないその後に作品を預けた。その間に、このレリーフが制作された当初の姿を写した写真が福澤センターから発掘され、往時の色彩を推測することができたことにより塚本太郎の勇姿がくっきりと浮かび上がるよう修復が施されたのである。新たな解説版も取り付けられ、本作品はこれからも水泳部の学生たちの青春を力づよく見守り続けてくれるに違いない。

(修復担当：有限会社修復研究所二十一)

修復前

修復中

読書会の人々

慶應義塾大学名誉教授　丸山　徹

慶應義塾読書会という名の「学校」がある。「先生」は塾の現役およびOBの教授たち、「生徒」はやはり塾出身の実業界のリーダーたちである。夏・冬の休みを除き、月一回、有楽町の糖業会館内の一室が講堂となる。

夕刻6時、ビールつき給食のあと、その日の当番講師による授業があり、8時には終わる。放課後は帰宅する者も、連れだって銀座に消えてゆく者も……。

読書会は、まだ戦後をひきずっていた昭和30年、若い学者の研究資金の不如意を心配された秋山孝之輔さん、大矢知昇さんをはじめとする実業界の大先輩たちが拵えて下さった勉強会である。以来68年の歳月が経過した。プールされた年会費は学術研究の助成に使わせていただき、学者の側からは研究の成果やそのこぼれ話しを会員に報告・還元するという仕組みである。

読書会風景（読売新聞、昭和30年12月16日　鈴木信太郎画伯作）

生徒の大半を実業界から迎えている学校とはいえ、講義内容は決して政治・経済に限るわけではない。文学歴史理学医学芸術体育まで一流の講師を用意できるのが読書会の自慢である。しかし居並ぶ生徒は妙に貫禄があって、時々生徒の方から「今日の話しはよくできた」などと、先生の成績が発表されたりするのであるから恐ろしい学校である。生徒のなかにも三井銀行の板倉譲治さんなど名うての論客がいて、同氏と大山道広教授との間にとりかわされた打々発止の論争（利子率はいかに決まるか?）は、いまも読書会の伝説となって噂に残る。

かつて中台関係がギクシャクして、キナ臭くなった台湾海峡に米海軍の艦が出動するという事態が生じた。しかしわが国と正式国交のない台湾の防衛に、国交のある中国を牽制する米軍艦が佐世保から出撃するのは考えてみれば矛盾ではないか――この質問にその日の当番講師であった石川忠雄教授はこう答えられた。「政治には話しをはっきりさせると、どうにもならなくなる問題がある。あえてはっきりさせないでおくところに味があるのです。」それこそ、なかなか味のある応答であった。今日只今の中台関係を、石川さんはどうご覧になるであろうか。

企業再建の神様とうたわれた早川種三さんは、食卓での座談に味があった。学生時代の早川さん、山岳部での活躍は人の知るところだが、遊びの方も半端ではない。ついに軍資金が底をついた。不安顔な花柳界の女性に囲まれて、ナーニ金などいくらでも送ってくるさと親元へ電報を打った――金送れ（カネオクレ）、送らねば死ぬ（オクラネバシヌ）。間もなく父上から返電が届いた。それにはたったひとこと――死ね（シネ）！この話しは早川さんの『青春八十年』にも載っているが、目の前のご本人から伺う一席はなんとも無類であった。

読書会風景（講師・石川忠雄氏、前列左から二番目・早川種三氏）

読書会の方々には読書会を離れても随分とお力添えをいただく場面があった。まず思い出すのは平成7年夏、三田山上を舞台にエコノメトリック・ソサエティの世界大会が内外から多数の客を招いて開催されたときのことである。最も重要な行事が行なわれる大ホールに、まだ冷房の設備がなかった。しかも猛暑であった。困りはてていると、読書会の橋本脩一さんから助け舟。ご自分の会社のお力で即席の冷房を設置して下さった。これがなければ会場は炎熱地獄になるところであった。また綱町三井倶楽部での大がかりなレセプションは、菊川孝夫さんがさくら銀行三田通支店を督励して万事采配を揮って下さった。板倉さんの応援もあったことはもちろんである。全く読書会の諸先輩のおかげで、われわれ学会関係者はなんとか面目をほどこすことができたのであった。学ぶべきもの、それは男の心意気である。

（＊）コロナ感染予防のため糖業会館が利用できない状況となり、ここしばらくの間、読書会は他に会場を移して開催している。
文中の会社名は当時の名称である。

千客万来

寄せられた声から VTRは心地よいナレーションともに慶応義塾大学の世界に引き込まれました。／門閥制度は親の敵でござるの一言はとても強く響きました。それこそが人は人の上に人をつくらず…へとつながっているからです。／海外の大学とのつながりが昔からあったことがわかる資料。／散った命　残ったペン／私は早稲田卒ですが、慶應も立派な学校だと改めて感じることが出来ました。今後も良きライバルとして、共に発展して行くことを願っています。／慶応には建物の印象から重厚な印象があったが、今日の見学で軽妙洒脱な校風であることがわかり、親近感がわいた。／私が印象を受けたのは、すべてとは言いませんが、偉人や先人の展示展のなかには、神様扱いするような展示が散見されるのですが、そのようなバイアスがかかった展示や資料はなく、あくまで福澤諭吉という1人の人間が将来を見据えて、試練に抗いつつも闘い、そして行動した想いが伝わり有意義なひと時でした。／福澤諭吉の奮闘困苦に敬意を表します。／令和3年に至るまで無かったのが不思議。／福沢諭吉の生涯がよくわかり、福沢諭吉に対する批判もしっかり展示されていたことは好感が持てました。／書物だけでなく、数多くの印象的な「物」が展示されていることが、当時の具体的なイメージを想像する助けとなっております。とりわけ、西洋の女神に日本の武士が頭を下げるステンドグラスと、精巧に作成された昔の三田キャンパスの模型は、筆舌しがたい感動を味わいました。／残念ながら官尊民卑、男尊女卑、「独立自尊」の精神が21世紀になっても日本社会では尚はびこっている／初めて来ましたが楽しすぎるあまり一時間近く滞在しておりました。福澤諭吉氏について多くのことを新たに知ることが出来て楽しかったです。／ウクライナ情勢はじめ、世界各地で戦争で現状を打破しようとする空気が蔓延しつつあるなかで、先の大戦で学びたくても学ぶことができず、散った彼等の遺品や遺書を通して当時の状況を追体験することで、学べる事と平和がいかに貴いかがいまだからこそ必要。／会場をもっと拡張して欲しい／福沢諭吉先生と同じく、敬愛する勝海舟先生をお願い致します。勝先生も喜ばれるはずです。笑／明治同様今は時代の転換期です　福沢を継ぐ人はいますか。

「福澤諭吉と『非暴力』」展について 千葉出身ですがこのような事件があったことも知らず、一冊の書物が与えた影響の大きさや学ぶことの大切さをしみじみと感じました。当時の福沢諭吉が30代ということにも驚きました。小学生の研究に「本展よりわかりやすい」とキャプションがつけられていたのも微笑ましかったです（本当に素晴らしいレポートでした）。／私と3人の児童で「独立自尊」って何?をきっかけに福澤先生のことを調べることになりました。総合的な学習の時間に児童と一緒に調べ、まとめました。それがこんな形で展示していただいたことを嬉しく思います。／千葉県の公立高校の教員です。生徒3名を引率して見学いたしました。生徒は、自身の地元で起きた出来事を改めて考える機会となると共に、教科書で出会う福沢諭吉と自らの地域との関わりを知り、新しい日本近代像、諭吉像を考える機会になったようです。

企画展示室の今後の予定

2023年度

2023年度秋季企画展
曾禰中條建築事務所と慶應義塾Ⅱ　昭和編
10月19日～12月16日

特別企画
三田につるの屋があった頃（仮）
9月20日～10月7日

慶應義塾史展示館の図録

『福澤諭吉記念慶應義塾史展示館開館記念図録』
A4判　24頁
2021年7月4日発行
800円

『慶応四年五月十五日—福澤諭吉、ウェーランド経済書講述の日』
A4判　76頁
2021年10月9日発行
1200円

『慶應野球と近代日本—“ヘラクレス”から“Enjoy Baseball”へ』
A4版　112頁
2022年7月30日発行
1800円

『福澤諭吉と『非暴力』—学問のすゝめ150年』
A4版　68頁
2022年11月30日発行
1100円

『曾禰中條建築事務所と慶應義塾』
A4版
2023年7月発行予定

当館常設展示室受付、カフェ八角塔、
三田インフォメーションプラザのほか、
慶應義塾公式グッズサイト（https://keiogoods.jp/）
からもお求めいただけます。

基本情報

開館年月日　2021年7月5日
空間デザイン　槇総合計画事務所
展示設計製作　株式会社トータルメディア開発研究所
床面積　常設展示室:280.44㎡　企画展示室:60.99㎡

スタッフ一覧

館長　平野　隆
副館長　都倉　武之
所員　西澤　直子、阿久澤　武史（兼運営委員）
所員　クラシゲ, ジェフリー ヨシオ、小山　太輝、齋藤　秀彦、末木　孝典、山内　慶太、結城　大佑
専門員　横山　寛
事務局　福澤研究センター　兼務

来館者数

2022/10	2022/11	2022/12	2023/1	2023/2	2023/3	2023/4	2023/5
1935名	4032名	1887名	1113名	1312名	2662名	2126名	1883名

※2022/11は、三田祭期間中に2日開館

諸記録

10月17日～12月17日	秋季企画展　福澤諭吉と『非暴力』—学問のすゝめ150年—
11月8日	企画者によるギャラリートーク　1回目
12月3日	企画者によるギャラリートーク　2回目
12月22日	2022年度 第2回所員会議
1月10日～2月4日	慶應義塾福澤研究センター新収資料展2023
2月3日～	ポストカードプレゼント（先着100名様）
2月17日～3月11日	中津市連携企画展　福澤諭吉が守った風景—中津・耶馬渓—
3月2日	2022年度 第3回運営委員会
3月14日～3月28日	慶應義塾大学文学部古文書室2022年度企画展 動物たちの江戸時代
3月20日～5月31日	新入生歓迎！ステッカープレゼント
6月14日	2023年度 第1回所員会議

福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより
Tempus（テンプス） No.04

発行日　2023年6月27日（年2回発行）　印刷　（有）梅沢印刷所
編集・発行　福澤諭吉記念慶應義塾史展示館
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45　電話 03-5427-1200　https://history.keio.ac.jp/

各種SNSはこちら　@keiohistory　@keiohistory　@keio_history